

南葵音楽文庫の源流考

——南葵楽堂における演奏会を中心に

山本宗由 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士前期課程（音楽学領域）

要旨

本研究は、日本初の音楽図書館といわれる南葵音楽文庫（1918年創設）を対象として、日本の音楽図書館の源流を明らかにするものである。南葵音楽文庫の創設者である徳川頼貞に関する記録と、併設されていた南葵楽堂での演奏会の分析を通して、南葵音楽文庫の一側面を明らかにすることを目的とする。

南葵音楽文庫は、ヘンデルやベートーヴェンの手稿資料など、西洋音楽に関する多数の貴重資料を持ち、これまで資料の価値にのみ注目されてきた。しかし、設立当初の南葵音楽文庫は、資料の収集以外にも演奏会の開催や、音楽に関する研究活動・音楽書の出版などの多様な活動を行っていた。本研究では、南葵音楽文庫の活動を明らかにするため、特にこれまで注目されてこなかった南葵楽堂での演奏会に着目して研究を行った。

第1章では、南葵音楽文庫のもととなった南葵文庫と、創設者である徳川頼倫について概観した。第1節では、南葵文庫設立の背景となった図書館史についてまとめ、南葵文庫が専門教育を受けた司書を置いていた点や、無料で一般公開をしていた点で西洋式の図書館制度を取り入れていたことを明らかにした。第2節では、南葵文庫の大本となった紀州徳川家に伝わる資料群の歴史と、徳川頼倫という人物についてまとめた。徳川家康の時代から始まり、音楽資料も含めた多様な資料が収集されてきたことを整理した上で、頼倫が留学経験を通してそれらの資料を西洋式図書館の設立という形で社会貢献に役立てようとしていたことを明らかにした。第3節では、南葵文庫の活動をまとめ、頼倫の理想がどのように体现されていたのかを考察した。その結果として、頼倫が図書館を通じてノーブレス・オブリージュを実現しようとしていたこと、一般市民に広く知識を公開しようとしたこと、講演会などを通して社会教育を行っていたことが明らかになった。

第2章では、当時の西洋音楽状況をふまえた上で、徳川頼貞が南葵楽堂の建設構想を持つに至った経緯について概観した。第1節では、南葵楽堂の設立の背景となる、当時の西洋音楽の状況について概観した。ここで、南葵楽堂に深く関わった東京音楽学校、軍楽隊、雅楽伶人、居留地の外国人音楽愛好家などの演奏団体について、当時置かれていた状況を整理した。第2節では、徳川頼貞が南葵楽堂の創設に至るまでの生い立ちについて概観した。頼貞が幼少期から西洋音楽に接していたことに加えて、学習院での音楽奨励会での活動が、頼貞が演奏家ではなく音楽のパトロンを意識するきっかけになっていたことを明らかにした。そして、ケンブリッジ大学での専門的な音楽の学びや、数多くの演奏会の経験を通して、南葵楽堂創設の構想を抱くにいたったことを明らかにした。

第3章では、南葵楽堂と南葵音楽文庫が実際に設立されるまでの経緯を整理し、南葵楽堂の理想とそれを体现していた演奏会について、全体像を明らかにした。第1節では、南葵楽堂が設立

されるまでの流れと、どのような建築家によって設計されたのかをまとめた。そして、南葵楽堂の設備について整理し、どのように聴衆への配慮がなされていたのかを明らかにした。また、南葵楽堂設立時の南葵音楽文庫の状況についても概観し、頼貞が音楽図書館の必要性を感じていながらも、十分な資料が用意できていなかったことから、資料収集に専念していたことが明らかになった。第2節では、南葵楽堂のシンボルであったパイプオルガンについて概観した。日本におけるオルガン受容の歴史をたどり、南葵楽堂が東洋最大規模のパイプオルガンをコンサートホールに設置しており、それによって設置以前には演奏できなかったような大規模な作品も演奏できる環境が整えられたことを明らかにした。第3節では、南葵楽堂が通俗的なものを排した西洋音楽専用の演奏会場として設立されており、南葵文庫の「広く一般に」開かれたものとは対照的に、「極真面目な少数の」聴衆を想定していたことが明らかになった。一方で、西洋音楽を通してノーブレス・オブリージュを実現するという、頼倫から受け継いだ発想も見られた。第4節では、演奏会プログラムの調査と演奏会に関する雑誌・新聞記事の調査を通して、南葵楽堂の演奏会の全体像を明らかにした。ここで、頼貞は演奏会プログラムには強く関与せず、財源と場所を提供するパトロンとしての役割が強かったことが明らかになった。また、南葵音楽文庫に関しては、一部で南葵楽堂の演奏会と連携している点もみられるが、ほとんどの演奏会では関与が認められなかった。そして、南葵楽堂が当時高度な技術を持っていた多様な演奏家（団体）による演奏会を開催しており、南葵楽堂の理想を体現していたことが明らかになった。

本研究により、徳川頼貞は、南葵楽堂において高度な技術を持つ演奏家による西洋音楽の演奏会を行うこと、当時日本には存在しなかったパイプオルガンを設置したホールを創設することを第一目的として掲げており、南葵音楽文庫の存在は副次的なものであることが明らかになった。そして、南葵楽堂の演奏会では、通俗的な音楽を排した高級な西洋芸術音楽のみを演奏するという徳川頼貞の目的を達成するため、国内外の主要な演奏家や演奏団体による演奏会が開催され、日本における西洋音楽の演奏会場の拠点の一つとなっていたことが明らかになった。